

自著と
その周辺

0歳の右半身と50歳の左半身

吉岡郁郎 著

出版：一元社
定価：1,300円
(本体1,182円+税10%)

小学生高学年の医学部進学希望者に理想の医師像を尋ねると、「苦しんでいる患者さんのどんな病気でも『治せる』お医者さん」と答える児童が少なくありません。私もそんな児童の一人であり、高校生になると、その頃夢中になって読んだ『ブラック・ジャック』に自分なりの医師像を重ねていました。

産婦人科医になり、色々な疾患を『治せる』医師を目指し、日夜研鑽を重ねてきたつもりでした。そうした中、悪性腫瘍を始めとする疾患の末期症状で、『治す』ことができないものの存在も、医師としての経験を積むことで私なりに理解してきました。そして、考えの浅い私の頭には、『治らない』=『死』という公式が勝手に出来上がっていました。

2011年1月に左被殻出血で右半身麻痺となりました。それは、『治す』ことを目指していた医師の、『治らない』体との同居の始まりでした。言い換えると、『治らない』体を持ちながら『生き』永らえていくということです。ですから、発病し暫くしてからの私は、自分の医師としてのモチベーションの持ち方が分からなくなりました。そしてそのことは、医師としてばかりではなく、「人間として生きる」という所にまで徐々に及んでいきました。

その様な時、リハビリ・スタッフから、「今の心情を記録に残せないか」という提案がありました。多少モチベーションは上がりましたが、すぐに挫折しました。自分のことを思い返すと、PTSDの様なフラッシュバックに襲われる日々が続き、更にそのことで弱い自分を卑下し、徐々に心を蝕んでいきました。

発病前に外来管理をしていた患者たちから、当時の様な漢方薬を中心とした外来の再開を求められたのは、心は真逆の、復帰後着任した高齢者施設ではいい顔を見せることに重圧を感じていた時期でした。それは、発症前の外来で、どんなに忙しい状況であっても何とか時間を捻出していた、更年期を中心とした不定愁訴外来でした。正直発病前は意識していなかったことでしたが、再開してすぐに麻痺を抱えた頭で思い付いたのは、これが『治す』ことに集中する外来ではなく、『寄り添う』ことを意識した外来であるということでした。この気付きは、自分に対して『治る』ことを意識することで、その反対の『治らない』事実が自らをおとしめていくことに目を向けさせてくれました。そして、この自分への『寄り添い』=自分を『治そう』とすることの無意味さ=あるがままの自分の受け入れへとつながり、それから拙書の執筆に集中できるようになりました。更には、そのことがあるがままを書こうという決意にまで至る様になりました。

先出の『ブラック・ジャック』に、『ときには真珠のように』という話があります。主人公が、爆発事故に巻き込まれた際の彼の主治医であった医師の臨終の床に呼ばれた所からストーリーが始まります。そこでその医師は、主人公に施した手術にミスがあったことを告白し詫言いました。直後、その医師は、主人公の懸命な救命措置にも関わらず絶命となります。その医師が霊となり、措置は完璧であったのに何故救えなかったと落ち込む主人公の肩を抱きささやきかけました。「人間が生き物の生き死にを自由にしようなんておこがましいとは思わなかね」私の原稿書きも何とか終盤にさしかかった頃、このストーリーに偶然再会しました。「自分が自分の体や心に『治すという改良』を加え自由にしようとするのはおこがましい」と自分なりのフレーズを重ね合わせ、それを糧に一気に脱稿へ進むことができました。あるがままを受け入れる、言葉でいうのは簡単ですが、実行するにはこんなにも辛く苦しいものだ、今回己の身をもって知るといい経験ができました。今後は、これを患者にフィードバックすることが課題だと考えています。

文末となりましたが、今回、拙書をご推薦いただきました伊那中央病院・院長本郷一博先生（信州大学名誉教授）に深謝申し上げます。

(長野県立病院機構長野県立木曽病院産婦人科 吉岡郁郎)

